

# 写植屋さんと私

# 写植屋さんと私

小形克宏

一九八一年一月、西新宿六丁目唐川ビル

「小形くん、ちょっと来て」

村木さんは奥の編集室から顔だけ出すと、そう言って私を中へ招き入れた。ここは西新宿の外れにある唐川ビル。青梅街道からすこし入った裏通りにある、ビルとは名ばかりの薄っぺらな二階建。その一階に『P』編集部はあった。大学三年生だった私はずっと以前から愛読していたそのマイナーなマンガ情報誌の片隅に「無給スタッフ募集」の記事を見つけ、飛びつくように応募した。すると十人近くの集団面接でなぜか一人だけ合格、前年十二月からタダ働きの雑用係として働きはじめたのだった。

まもなく、人々が交わす四方山話から、少し前に編集部的主力が内紛でごっそり抜けた

こと、だから現在は極端な人手不足に陥っていることを知った。道理でいつ行っても閑散としていた訳だ。

数ヵ月後に四年生になる私にとって、就職は嫌でもやってくる現実だ。しかし三流文系私大の学生にとって零細出版社だって高嶺の花であり、自分より優秀な他大学の学生に交じって就職活動をして、正社員として採用してもらえとは到底思えない。それでもどうにかして出版業界に潜り込めないかと思いい、早めに手を打つつもりで応募した私だったが、この状況は紛れもなくラッキーだった。

村木さんは私より数年先輩、早稲田大学を留年し続けているという噂だった。『妖怪ハントアー』の稗田礼二郎みたいなストリートロングで、物静かだけど怒らせるとちよつと怖そう。村木さんは人気のない編集室で、自分の机の隣りに私を座らせると言った。

「今日は小形くんに編集の仕事を教えるね」

彼は自分の机の上に並べられた『P』のバックナンバーから一冊を抜きだすと、ページを開いて私に見せながら言った。

「ウチに限らず、どんな雑誌も版下といって、この誌面そっくりの雛形を作り、それを印刷しているんだ。ウチは記事の担当者が自分で版下制作することになっているから、まずその作り方を覚えなさいといけない。でも版下を作るには向き不向きもあるんで……」

そう言って村木さんは、私のことを探るように見た。

「ひとまず今日は、版下を作るために必要な、写植の出し方から覚えてもらおうね」

「写植……？」

「うん、版下の文字の部分を写植というんだ。原稿を写植屋さんに持って行って、それを写植機という大きな機械で打ってもらい、打ち上がった写植をきれいに切り抜いて版下用紙に貼っていく」

そう言うと、開いた『P』の本文の部分を指さすと言った。

「この文字も筆者の原稿を写植で打ってもらったんだけど、写植屋さんが打つためには原稿だけではなく、それをどんな種類の文字で、どんなサイズで打つのかっていう〈指定〉が必要なんだ」

村木さんは机の一番上の長い引き出しを開けて、透明のプラスチック・フィルムを取り出して、私の前に置いた。なんだろうこれは、升目がびっしり印刷されている。縦に一行ごとに並んだ升目は、右端は米粒のように小さいが、左に行くほど大きくなっていき、左端は一円玉ほどの大きさだ。

「これが級数表。写植の大きさとか行間を測るもの」

よく見ると、縦長の級数表の上端に右から左に〈7〉〈8〉〈9〉〈10〉〈11〉……と番号

が印刷されていて、その番号のすぐ下に同じサイズの升目がずらっと下端まで伸びている。番号の最初の方は順番に一つずつ増えていくが、途中から二つ飛ばし四つ飛ばしになり、最後の方は〈32〉〈38〉〈44〉……となり、左端は〈62〉だ。

「たとえば〈9〉というのは九級、〈50〉は五十級というサイズで、その横に並んでいる升目がそのサイズの原寸なんだ。たとえばね……」

そう言うと、村木さんは級数表を本文の上に当てた。しばらく級数表を両手で細かく動かした後、動かないようにびったり抑えながら言った。

「見てご覧」

なんだろう。私は腰を浮かして村木さんの手元を覗き込む。見ると一ページ四段で組まれた本文のうち、一番上の段に級数表が重ねられている。

「最初の一行目」

言われて本文冒頭の行を見ると、升目の四角にびたりと収まってまるで原稿用紙のように下の文字が読める。升目の列の上には〈9〉と書かれている。ところがすぐ隣の〈10〉の列は、最初は文字と合っているのに行末に行くほどずれが広がってよく読めない。

「ぴったり合っているのは九級の升目だから、文字サイズは九級というわけ。それだけじゃなくて字詰め、一行あたりの文字数も測ることができるでしょ？」

本当だ。縦に並んだ升目には、十文字ごとに〈10〉〈20〉〈30〉……と数字が入り、文字数が分かるようになってる。さらによく見ると、五文字目、十五文字目、二十五文字目……と五文字分ずれた十文字ごとの升目に〈●〉のマークが入っている。

「でも、級数と字詰めだけ指定しても、写植屋さんは打てないよ。これを見て」

村木さんは、級数表をそのまま九十度動かすと、また両手で文字に合わせて細かく動かした後、級数表を固定して言った。

「ほら」

今度は本文の各行頭一文字目を横断するように級数表が当てられている。みると、十二級の升目に行頭の文字がぴったり合っている。すごい、一枚の級数表でいろんなことができるんだ。

「行と行の間隔を行間といい、単位を歯で表す。歯というのは写植機に組み込まれている歯車からきているらしい。ちなみに、級と歯は同じだけど、文字サイズを表す時だけ、歯ではなく級を使う。分かるかな、ちょっと自分でも測ってみて」

そう言って村木さんは私に『P』と級数表を渡した。

「テンとかマルがあるとずれちゃうから、そういうのがなるべくない行を探すといいよ」私は『P』をめくっていくと、片端から級数表を当てていった。そうか、今まで知らな

かったけど、いつも読んでいる本や雑誌の文字って、全部こうやって作られていたんだ。私はワクワクした。なんか世界の秘密を教えてもらったみたいだ。そんな私を見ながら、やがて村木さんは自分の机の上に立てかけられていた大きい茶封筒を抜きとった。

「これはさっき写真屋さんからもらってきたものだけど……」

中から表面がツルツルした厚手の白い紙を取り出して言った。

「写真ってというのは、これ」

そこには小さな文字が一定の字詰めで、全体が四角い箱のように印字されている。そう、いつも私が読んでいた雑誌の本文そのものだ。村木さんは写真を机の上に置くと、今度は封筒から十枚ほどの原稿用紙の束を取り出して、隣に置いた。

「これは写真の元になった原稿。ほら、原稿用紙の余白を見て、赤鉛筆で何か書いてあるでしょ。これは僕が書き込んだ写真指定で、文字の種類、級数、行間、字詰めなんかを指定してあるの」

原稿用紙の何も書かれていない部分には、赤鉛筆で〈M、9 Q 12 H、1 L 18 W〉と書かれてあった。なんだこの暗号は。

「この〈M〉というのが文字の種類で明朝体の〈M〉。〈9 Q〉というのは文字サイズが九級ということで、級を早く書くために〈Q〉にしている。〈12 H〉というのは行間十二

歯で、やはり歯を早く書くために〈H〉にしているんだ。〈1 L 18 W〉というのは〈1 L 18 W〉が一行当たりという意味で、〈18 W〉が十八文字、つまり〈一行十八文字の字詰め打つ〉という意味。この文字の種類、級数、行間、字詰めの四つさえ指定すれば、写植屋さんは文章を打ってくれるんだ」

「四つさえ……」

「そう。ついでに言うと、うちは情報とかコラムみたいに短い文章は9 Q 12 H、評論みたいに長めの文章は10 Q 15 Hだからね」

「キュウキュウ・ジュウニハとジュツキュウ・ジュウゴハ……」

初めて聞く珍しい言葉の響き、まるで呪文みたいだ。そうか、秘密の扉を開ける呪文なんだな。私は忘れないように、頭の中でキュウキュウ・ジュウニハ、ジュツキュウ・ジュウゴハと繰り返し返した。

## 一九八一年二月、北新宿二丁目、駒津写植

「小形くん、お使い頼める？」

佐野さんが奥の机から呼びかけた。



「はい」

佐野さんの頼みならよろこんで、心の中でそうつぶやいて駆け寄る。佐野さんは毎号『P』の表紙を担当しているデザイナーだ。すらりとした美しい人だが、残念ながら編集長の奥さんだ。

佐野さんはどうしてあの、いつも不機嫌で怒鳴ってばかりいる編集長と結婚したのだろう。ある日疑問に思っ、数年前から編集部に出入りしている高校中退の山ちゃんに聞いたことがある。すると二人は幼馴染みで、ずっと若い頃に編集長が拌み倒して一緒になったんだよね、と教えてくれた。そばで聞いていたラブコメと時代劇好きの女子大生芝ちゃん「断り切れなかったのね——」とため息をついた。

「この原稿を駒津写植さんに届けてちょうだい。駒津写植は行ったことある？」

「いえ、初めてです」

「そう、

一九八一年七月、新宿二丁目・ラポートピアビル

目が覚めたら朝九時半だった。

「しまった！」

あわてて起きた私は